

はじめに

市民憲章を基本理念とし、「新たな力とともに創る 笑顔と元気のみなとまち へきなん」を将来像に掲げた『第6次碧南市総合計画』が2年目となり、基本施策10『健康・医療』に掲げました、生活習慣病の予防とライフステージに合わせた健康づくり、地域全体で進める健康づくり、新たな感染症への対策の取り組みを進めております。

また、平成26年度から令和6年度を計画期間とする「へきなん健康づくり21プラン(第二次)」では、「生涯健やかでいきいきと過ごせるまち 碧南市」を基本理念とし、母子保健事業、予防接種事業、成人保健事業、介護予防事業、歯科保健事業等の事業により、妊娠、出産期から高齢期までの幅広い世代における市民の健康管理・健康づくりを支援しています。

本市においては昭和42年に発足しました、医師会、歯科医師会、薬剤師会、看護師会、保健所、各種団体、市民及び行政が一体となった『碧南市健康を守る会』による、いわゆる市民ぐるみの健康づくりへの取り組みも重要な役割を担っています。

新型コロナウイルス感染症が国内で初めて確認されて以来、2年以上が経過しました。依然、様々な変異株が出現と消滅を繰り返しており、これまで新型コロナウイルスワクチンの接種体制の整備、地域の医療体制を維持継続している医療機関への支援事業、陽性者など自宅療養されている方への生活支援事業の実施など、様々な対策を実施してまいりました。これからは、新型コロナウイルスとも共存し、感染抑制を図りながら社会経済活動を継続していかねばなりません。

「健康は市民の宝」です。活動的で自立した生活を楽しむため、市民の皆様一人ひとりが健康の大切さを認識し、生涯にわたり「自分の健康は自分で守る」という自覚を持っていただくとともに、市民ニーズに合った新しい健康づくり支援のための環境整備を、時代に合わせて積極的に進めてまいりたいと思います。

最後に、関係機関との密な連携・協力により、本市の保健事業が継続実施できましたことに感謝を申し上げるとともに、本年報を今後の保健事業の参考として活用していただければ幸いと存じます。

令和4年9月

碧南市長 禰宜田 政信

緒 言

現在の碧南市保健センターが開設された昭和 57 年（1982 年）から 40 年の歳月が流れました。開設当初からセンタードックの胃がん検診に長年従事した私にとっては誠に感慨深いものがございます。

今回、令和 3 年度の総括としてこの緒言を述べるわけですが、昨年度の緒言にも触れたように、令和 2 年 1 月に本邦で初めて新型コロナウイルスの感染者が出て以来、もう 2 年以上この感染症により私たちの日常生活は多大な制限を強いられてきました。また、当然のごとく保健センターにおける各種事業も制約され、縮小や延期あるいは中止になったものが多数あります。

さて、この 40 年の変遷を少しわが国での疾病による死亡者数の順位でみると、昭和 30 年ころから 55 年まで第一位であった脳血管疾患が悪性新生物にそのトップの座を奪われ、以後悪性新生物による死亡者は増加の一途をたどっています。そして、昭和 50 年代後半には脳血管疾患による死亡者数は心臓疾患に第二位の座を明け渡し、平成 7～9 年ころ一時期第二位に復活しましたが、その後また第三位となり、しばらくの間第一位が悪性新生物、第二位が心臓疾患、第三位が脳血管疾患でした。平成 20 年過ぎ、この第三位が肺炎に置き換わり平成 28 年まで脳血管疾患が第四位となりました。しかし、この間に死亡者が急増してきたのが老衰です。平成 29 年における疾病によるこの順位は、第一位は無論悪性新生物であり、第二位が心臓疾患、第三位は脳血管疾患、第四位が老衰、そして第五位が肺炎であり、その翌年平成 30 年には第一位から順に、悪性新生物、心臓疾患、老衰、脳血管疾患、肺炎となり、注目すべきは令和 2 年にこの第五位の肺炎のすぐ次が誤嚥性肺炎になっている点です。最新の令和 2 年の統計では第一位の悪性新生物（27.6%）から順に、心臓疾患（15.0%）、老衰（9.6%）、脳血管疾患（7.5%）、肺炎（5.7%）、誤嚥性肺炎（3.1%）でした。このことはわが国における超高齢化がこの死亡者数の順位にも大いに反映されているものと考えます。

平成 9 年度以降すっかり定着した生活習慣病ということばや平成 20 年度から始まった特定健康診査すなわち「メタボ健診」。これは生活習慣病の中でもとくに内臓脂肪症候群（メタボ）という病態が上記の死亡原因にみられるように、一部の悪性新生物はじめ心臓疾患や脳血管疾患に多大に関与しています。また高齢者の急増はがんの発生率が高まるのみならず、動脈硬化と深くかかわる心臓や脳血管疾患も増えるばかりではなく、老衰やインフルエンザさらには新型コロナウイルス

ルス感染症による肺炎での死亡や誤嚥性肺炎による死亡が増加する結果となります。その意味でも保健センター内に事務局を置く市健康課が行う各種の健康教育事業やドックによる健診事業の役割は極めて重要なものであります。

一方、無視できないのが少子化問題です。最新のわが国の出生率は新型コロナ禍の影響などもあってか、戦後遂に最少となったようです。この先の社会のためにもこどもについてだけでなく、若い親世代の就業問題やその生活環境の改善、さらには子育てへの経済的・福祉的サポートなど、将来を見据えた総合的な観点に基づく国としての施策が求められます。

以上今回は、健康課事業の細部には何も触れずに40年の月日を経た保健センター年報に対して、今抱えている社会問題を中心に述べさせていただきました。

最後になりますが、このコロナ禍で始まった新型コロナワクチンの接種事業や令和4年度から推奨を再開することとなった子宮頸がんワクチン接種も含め、健康課職員の皆さんには大変ご苦勞をお掛けしています。今回の年報作成についても多大なるご支援をいただきましたこと、ここに心より深謝いたし筆を置きます。

令和4年9月

碧南市健康を守る会 会長 山中 寛紀